

とられない自由な立場」が強調され、「黄金の20年代」の神話が持ち出されたことがあります。ワイマル共和国時代は自由で民主的な時代であったのに、左右の過激なテロル潮流が、ワイマル連合のような中庸と自由の民主主義をつきくずしたのだ、といわれました。あれは歴史の現実を隠蔽し、ファシズムを降って湧いた災難のようなものとみなし、若い連邦共和国を反動的な伝統的路線に結びつけようとした、悪質なイデオロギーでした。じっさいには、ワイマル共和国の時代にも、歴史におくれたドイツの市民階級は時代の矛盾を解決できなかったのです。だから、共和国のなかでDDPのような政党は、何ら重要な役割を演じることなく、あれほど急速に衰退していったのです。文化的領域でも、「おゝ人間よゝ」の表現主義から、技術への熱狂、非合理主義的な「事実の独裁」の在即物主義へ、ナチズムへのあまりに急速な解体過程がみられたのでした。そういうなかで例外的にT. マンのような作家は、歴史の岐路に立って選択を迫られたとき、はっきりと「進歩」の側に立つことを表明したのでした。

ワイマル共和国のなかでは、文学を享受の対象とするのではなく、真の自由のたたかいの手段に転

換しようとした作家は、いっそう少数の例外にすぎませんでした。そういう例外がブレヒトでありマリク出版社文筆家たちでした。

このコレクションが、その重点の置き方だけを見ても、「黄金の20年代」などというやくざな歴史評価とは対照的な歴史評価をおこなっていることを、私たちは知ることができると思います。

他方、しかし、私たちは、現在まだ、なぜワイマル共和国のドイツでは真の民主主義が根づかなかったのか、という問題を十分には解明しておりません。コミンテルン時代以来のドイツの歴史的研究は、現在も東西ドイツにおいてさまざまな潮流によって、さまざまな分野で、おしすすめられています。東西ドイツの政治路線の問題がそれにからみ、問題の解明は今日いっそう複雑で困難なものになってきているといえます。であればこそ、しかし、私たちにあって、ワイマル共和国時代の研究は、いっそうやりがいのある仕事である、といつてよいのではないのでしょうか。その意味で、このコレクションが広くかつ徹底的に共同利用され、真の学問の発展に役立てられることを希望します。

——資料紹介——②

中 院 文 庫

中院文庫は具平親王を遠祖とする村上源氏の流れをくむ久我家第七代通親の五男通方を家祖とする中院家伝世の旧蔵書で、大正十二年住友吉左衛門氏が姻戚関係の縁故で中院家より文書を含む典籍千四十一冊を一括購入して本学に寄贈されたものである。その蔵書内容は室町末期より江戸末期に及ぶ国学の註釈書、歌書を中心に元 日 節 会 次第、除目部類、中院家拝賀記など中院歴世の朝儀典礼に関する日記、書留、覚書および石清水関係、加茂祭使記等社寺に関する宗教的行事、そのほか当家装束記などの有職故実に関するものなど多岐にわたっている。これらはほとんど自筆の原本で占められ、当時の風俗史、文化史、あるいは

宮廷の行事または貴族の生活を知る上にも貴重な研究資料となっている。ことに源氏物語、古今集の註釈は中院の学祖と称せられる第十四代通勝、その子通村、孫通純、曾孫通茂と続いて江戸末期まで継承されてきたものである。

通勝(永保元年—慶長16年)
(1558—1611)は室町末期の国学界における重鎮の一人であった。三条西実枝(三光院豪空)、細川幽斎らに師事し、宗祇、三条西家と続く正統派源語学を受け継いだのである。また幽斎からは古今和歌集の伝および秘奥を学び歌人としても当時の歌壇に重きをなしていた。こうして中院家に源氏物語、古今集の註釈書が家学として歴代世襲されたのはこの通勝の基礎固めによるものと言っ

ても過言ではない。通勝の代表的な著書としては第一に岷江入楚を挙げなければならない。岷江入楚は河内本、河海抄始め前人の註釈書を網羅しそれに自己の註釈も加え集大成したもので源語については現在においても最上の註釈書として用いられている。ほかに源氏物語聞書、中院通勝記、歌書には詠歌大既の註釈書、百人一首抄などがある。

通勝の嗣子通村(天正16年一承応2年
1588-1653)および孫通純(慶長7年一承応2年
1612-1653)は通勝の学風を継承しやはり正統源語学者として国学界に重きをなしていた。また通村は歌道にも長じ当時並ぶものなき名手でありその上世尊寺流の能筆家として世に知られていた。通村の著書としては通村の講義を通純が筆記したという源氏物語草稿、江戸初期の記録をとどめた塵芥記、歌集には中院通村詠草、中院通村歌集などがある。なお通純には古今和歌集聞書がある。

通勝に始まった正統派源語学も曾孫通茂(寛永8年
1631-二宝永7年
1710)に至って熊沢蕃山の古礼古楽の復興と言う新しい思想の影響を受け、王政復古的な新風をその著書にも講義にも採り入れた進歩学派に移行して行ったのである。通茂の嗣子通躬(二元文4
年
1748)も父の学風を継ぎ以後通藤、通枝、通維、通古、通知、通繫、通知と受け継がれ江戸末期にまで及んでいる。そもそも中院家は武家伝奏の家系であり、通茂も役目柄江戸へ下向する機会も多く、江

戸において武家に接触するたびに朝廷の衰微を嘆いていた時でもあり蕃山の思想に共鳴したものであろう。また通茂も通村と同様に能筆家として知られ、その自筆本も流麗な筆致で書かれている。著書としては源氏聞書、蕃山の源氏外伝の異本と称せられ通茂が外伝から道学と音楽を抜き出し潤色したものといわれている源氏御抄、伊勢物語不審覚書のほか一連の伊勢物語註釈書、樗記があり歌集としては和歌の名手としても聞え高く中院通茂歌集詠歌え大概などがあり、また通村、通純、通茂の歌集を合した三槐和歌集もある。さらに、通茂か、一門の人の作といわれるもので源氏物語音楽事の一冊がある。この書は蕃山の思想に影響されたものか源氏物語の簞木、若紫から篝火までの帖より音楽に関係ある部分を抜粋して、楽器の解説も付けそれに私勘、自説などの註を加えたものである。

そのほか文庫の中には歴世の通枝記、十輪院内府記などの日記、当家書法、古今伝授起請文など家学に関するもの、後水尾院歌集、三条西実隆の逍遙院百首、中院第十代通秀の所持していた耕雲明魏自筆本と称せられている仙源抄は道勝に伝わり現在も当文庫中に所蔵されている。

(附属図書館 森島 啓)

医学図書館の開館時間の延長

医学図書館では、昭和57年4月1日より、開館時間を延長し、下記のとおり開館しています。ぜひご利用下さい。

記

平日 午前9時から午後8時まで

土曜日 午前9時から午後5時まで

(但し、日曜、祝祭日、創立記念日および解剖体祭日は休館)